戰後に於ける列國の武裝

特別
ヌ6
8490
1798(1)
早稲田大学図書館

76
8490
(1798)(1)

戰後に於ける列國の武裝

陸軍少將　宇垣一成

歐洲國民の充溢せる力と財との精を傾け、現代文明の精華たる學と術との粹を注ぎて、現に歐洲の天地に演ぜられつつある、龍鬪虎搏的の大活劇は、今や歲月を閲すること茲に二年有半に達したるに、此の前古未曾有の大戰爭が社會の各方面に與へつつある影響は、實に多種多樣にして而かも莫大でなければならぬ、從つて之きが爲に吾人の得たる各種の教訓

五年十月十四　沖稿

も決して尠少からざである、取り分け軍事に關する者は頗る豊富であると謂つべきだ、乍併戰爭其の者は今尚進行中に在り、將又最近講和の提議ありしとは云へ、聯合側に於て左して耳を傾けぬ現況であるから、尚當分は此の惨劇の繼續するものと考へるが妥當である、從て何時平和の曙光が認め得るものやきや如何なる形式の下に講和が成立すべきか、戰後に於て如何に世界地圖の色彩が變更さるべきやは神なら知る所にして、未だ全く判定し難き事柄である、其

結果として現戰爭の與へたる教訓、之きより得る經驗も亦今後の經過に徴した上でなければ、可否に對する最后の斷案を下すことの、過早の感ある者尠なくない、就中列國國防の施設、勢力、編制等の如きは、列國境界線の異動に至大の關係を有するから、尚更今日に於て之れを論斷することは、至難の徒勞事である、夫き故余は茲に單に過去の出來事よりして將來の趨勢を推定し得る事項の内に、主要なる三四の點を論述し、讀者に結

以て國防施設講究の參考に供する積りである、
一國民性の陶冶歐洲天地原に於ける諸戰場に於
て兩軍對峙曠日彌久、勝敗の決容易に逆睹し
難きの觀あるは、果して何に原因するか、之き吾人の
大に注意する點である、各方面に於ける對峙兩軍
間の兵力其の他兵器彈藥の準備の關係に決して
到る處平衡を得て來すべきの機毫末もなしとは
云へぬ、否慥に權衡の失して居る地点か少なくない
にも拘はらず物質上の優者にして容易に劣者を突破蹂躪し能はざる所以のものは、深く詮索し
て見れば、結局自己の小我を捨てて大我に殉ずる的の犧
牲心及勇往邁進的の意氣に於て欠くる點に歸
納し得る樣である、近時聯合軍の威力著しく增進
して漸次勝算增加の傾向を示しつゝある所以のもの
は、物質的準備の整頓も其の一因たるを失はずとは
雖も主たる原因は寧ろ無形的要素が、聯合國民の
自覺に依りて漸次陶冶向上せられつゝある結果の發
露に外ならずと信するのが至當である、徐ろに列

國現時の施設を通覽すれば、戰後否戰爭の終るを待つまでもなく、現に歐米の國民性は瞑々裡に武裝的模言すれば硬性に變化進展しつつありと認め得べき節々多々存在して居る、彼の個人の自由意志の尊重と國民最高の主義とせる英國さへも、今や強制徴兵法を實施するとかも、或は軍需品の製造に使用し得べき、民間私有の工場をも、官の強制監督の下に置くことかしてもそれは左したる苦情も出ぬ狀況である別けて宇内に於て比較的軍事に冷靜なり

し米國さへも、歐洲大戰爭に甚だく刺戟せられし結果であると見へ、何分近時に於ける軍備擴張熱の勃興は凄まじきの勢を呈して居るのみならず各種學校教育の一科目として普く兵式訓練を加へたとも傳へられて居る。

要は世界告知と七生國家の爲めには、個人の自由生命も財も資材も儀性と一般するも敢て辭せざる底の精神の發露は實に顯著となりつつある、其の他戰爭に餘儀なくせられたとは明かである、其の自然の結果であるかも知れぬが、兎に角文戰國民間には、質素の美風、勤儉力行の良習は大に涵養陶冶

されつつある、食料の節約、婦人小児の職業的活動、乃至は各邦に於ける奢侈品輸入の禁止の如き、又は多年一種の暴飲癖を有する露國國民が酒類販賣禁止の制限を甘受しつつあるが如き、大体に安逸を貪り嬉欲を逞しうする的の従来の弊風は、漸次除去されて、國民性は堅實剛毅の度を高めつつあるは確かにある、換言すれば各邦ともに國民の財と業とを奪はずして國防能力を高め得る所謂國民性の陶冶向上に努めつつある趨勢である、這間の消息は素人の窺知し難き所なれども、之に伴なう弊害も亦尠からざるべし、

律する為には、至大の關係を有するから、須らく識者の三省を要する

二、國家の自給自活的施設、歐洲今次の大戰爭破裂前に在りては、文化の進歩交通の發達に伴いて、大に旧套を脱却し、対立せる諸国間に劃せられある国境的障壁の力を弱めて相互近通混和の程度を高めたるも、所謂露國の産穀は独国に輸入せられて同國民の生存に供し、独国の化学工芸品は盛に英佛に輸出せられて此等國民の活動を資け、露国は工業品を独国資金を佛国の輸入に待ちて、蓄有無相通ず相補ぶし、国民生活上大なる幸福利便を享受しつつあり、

たゞ不幸にして、斯く生活經済状態の相互交錯複雑を極めし諸国民間に於ては、国民自己の生存に直接致命的

痛痒を感するから、此事生活経済状態の根柢を覆す様な大戦争は決して起らぬと云ふ觀察は、宇内の識者間に強んと一致して居た所である、然るに国家の存立発展の為ては、国民の幸福を一時犠牲とするも辞せざるとのお考へ仕要が存するから、悲惨を極むる大戦争は世界人多数の預期に反して勃発したのである、戦争開始以来は、彼の所謂有無相通じ相補ふ的に幸福視せられて居た所の、従来の国民生活の因果は覿面現はれ来りて、輸出入の杜絶遅滞の悲境に伴ひ、各種の不便不自由を感するに

至りた、此の苦酸は遂かに戦場の中心より遠さかりて居る、吾人同胞までも、等しく嘗め来りた所である、茲に於て国家奨励の声は、世界の隅々までも風靡して、各邦競ふて軍用諸品は勿論のこと、財政経済其の他の産業に渉り続て他国の補給を待つことなく、独立自給し得るの途を講じ始めた、就中四面重圍の裡に在る同盟側に於て、一段と至大の努力が拂はれた様である、此等努力の結果として今日にては世界各邦ともに、大部分は自給自活の道が確立したのは事実である、此の趨勢は将来平

和恢復の後に渉りて未だも、益々助長さるべき運命を有して居る斯の如く他国の融通補給を待たつゝ、自国に於て万事万端自給自給し得ると云ふことは将来に於ける開戦の可能並戦争の持続性を一段と高め得たるも一面に於ては觀察し得るのである、此のことは今後の国防を講ずる者の須らく大に注意を要する点である、

（のみならず一般防衛）

三、徹底的なる作戦の準備　一昨々夏欧洲戦乱勃発より昨春頃まで約一年有半を経る間の戦争は一言にして之を評すれば所謂準備と不準備の闘争に外ならず、独逸及其與党側は、百年武装的に訓練し、数十年戦闘準備を整へたる国家を挙げて兵火を開きたのである、之に反して聯合側は立ちては、佛国を除き殆んど之を以て決して十分とは云ふ（かなり有力）能はず全く不準備の体勢に立りて開戦を余儀なくせられたのは、方人周知の事柄である、就中伊国のぬきは漸く一昨年初夏に至り始めて参戦準備略完整し、漸く漸く戦局の渦中

真の和平は軍備あり、ただ又は用兵を誤りては攻防両併攻撃の自由全く我に存する上対手をして疲弊せしめ屈する地く

て投じ得た、若し英露両国の戦争準備が平時に於て徹底的に完整して居たならば伊太利の大悲劇は起らずして開戦の戦争誘因たる墺塞間の紛擾も暗から暗へ葬り去られたに違ひない、少くも伊国の準備もって禁のあって開戦当初より其態度を明確にせしならば恐らく世界に於ける醒風血雨の期間を短縮し得たならんと、吾人の今尚深く遺憾とする所である、翻って我が平時に於ける戦争準備の完整は平和の維持に至大の関係を有するのみならず、一旦不幸にして鉄火相見ゆるに至りても、戦期を短縮局限する為めに偉大の効果あるべきことは、茲に余の喋々を要せず、一昨々年独逸軍が自国我を蹂躙し仏軍を席捲して、恰も秋風枯葉を拂ふの勢を以て、仏都巴里を指呼の間に眺めながら、茲に頓挫を来して功を一簣に缺き又一昨年大軍東方に殺到して露軍の精鋭を屠り蹂躙しながらも遂に露国を征服せしめ能はざりしが如き其の他英仏合軍が試みたる「シヤンパニユー」及「ソンム」等の大攻勢の挫折して独軍戦線の一角だに突破し得ざりし事因那辺に存するや、畢竟する所根気強き攻勢継続の準備に於て欠くる所あり、結果に外ならず、所謂強

真の平和は軍備あり

弩の示勢益々昏縞し穿ち能はざりし痛恨事は各国の戦績
又復
が明示して居る、故に我後に於ては平和維持の為まれ、戦期
ゆえである
経緯の為まれ、侍又根気強き攻勢決行の為まれ列国が競争
遂
軍備の徹底的完整に努力すべきは時機ある而して其の
努力の標準とは強弩の示勢尚克く鉄板を穿貫し得る
の態に直くべきと様れ、従来の若き戦艦に徴して、殆んと疑
ふの余地を存ちず、

四、技術工藝の遺憾ちき應用、蛇蹤数百里に亘る戦線の
到る處に於ては今や数百年来培養再復育せられたる文化工

藝の粋を傾けて遺憾なく利用しつつある、又開戦以後に於ては
益々促進せられたる各種新發明が多々戦場に應用せられて居
法は
る、此等の全部を傾けて読者に明瞭
到底許さざる所なるを以て敢て或は單に重要と認むる二三件を記
五人数年前または無数だったさりし
述するに止めて置く、其の第一は室中、紅服に関する施設である、
同我前後は、飛空機は主として敵情偵察の補助に、稀に大砲
弾薬達
射撃のとき射弾到着の正否を観測する為に使用せらるるに過
ぎざるものと、吾人は考へて居た、然るに開戦後の今日に於ては、
改期以上十
此の二大任務が完全に達成せらるるに至りしのみならず、其範圍に

大に擴張せられて居る、加之ちらぼ爆彈投下に依りて、敵の軍隊、製造所場、市街等は攻撃破壊する為特に遠距離に亦用せらるるに至りたゝ、從つて之れを攻撃駆逐する為の專用航空機が採用せらるるに至り今や制空權獲得の為屢々彼我航空機間の仕烈なる戦闘が演出せられ、其の戦闘規模並度数も漸次擴大の傾向を示して居る、帝國都鄙を挙て士気の心膽を寒からしめたる「ナイル」「スミス」近くは「スチンソン」壊の宙返り術のめざわ

戦場後方の斯術練習場に於ては、目下盛んに演練せられつゝあるのみならず、亦之に適応する器材も続々發明新調せられてある、此の現時の趨勢に鑑み、一方将来に於ける航空機能力の増進に考へ及ぼしたならば、戦后若干年の内には各国ともに一大航空軍を建設常備するに至るべきは強ち疑ふの余地を存せぬ、次は自動的輸送機関の応用である、三万余の車輌は、今や東西南の各戦場に駆駆奔走して軍隊、弾薬、糧秣、傷病者の輸送上に大活動を試みて居る、実は東普並露国内の沼澤多き地方に於

けるこの適用に関しては吾人の大に疑問とする所である、
近時開発所によれば濕潤沮洳の地方にも今や人為的に
構成せられたる良路を認め得るに至り、此等機関は盛ん
に活動しありとの事である、敵奇襲に於て大軍を以てする、山地
の通過、大河の渡過の如きは、古来用兵上の至難事とした處
である、殊に「ウイスケユラ」「ニーメン」「サン」「ダニーユブ」諸大
河の渡過、「カルパーテン」山脈並墺羅国境に在る大山径の
通過も、近代技術の補助に依りて容易に実行せられた
るが如き觀がある、其の他巨砲の製造、豊富なる弾薬の

運輸通信の設備

準備就中近接戦闘を有利に導き特種兵器の構
造等は、論するまでもなく、将来国家の武装に方り亦大に要事視
すべき事柄である、之を要するに人力を
以て天然を制服し之を凌駕し得るの程度は著しく増進
の勢にある、此の急運に後れざる為の努力は、技術工藝方
面に於て尚ほ著しく幼稚の域を脱せざる帝国現時の立場
に於ては殊更に注意すべき點である

(一行空)

戦法に於ける列国の軍事施設は各種の形体を具して実
現せらるるならんも其の陸上の施設としては、形体の如何に

拘はらず、上来述べたる四大要目を基準として之を適用する程度如何と帰着するものと考へて居りて左したる間違はあるまじ、第五吾人の将来に対する陸上施設も此の要目の適確なる実現を期する方針の下に遠進し来たらば先つ以て大体目的を達すと信ずる、

今次の大戦争に於ける思潮相まる現象は、おくし宇内各国民の心裡に平和愛好の希望を増進せしむるに至りたるが如く、不倫各階層の道義力が殺伐なる人道主義に代りて、常に正義と人道とが人類の意志の制禁力を強化し、戦争の利害に対する観念を制限し、降るに訂正する限りは、如何なる形容を以て調和するとも一切の平和は決して武装的平和にあらず、如何の如き状況の下に行はるるも

戦後に於ける列國の武装

陸軍少將　宇垣一成

歐洲國民の充溢せる力と財との精を傾け、現代文明の精華たる學と術との粹を注ぎて、現に歐洲の天地に演ぜられつつある、龍闘虎搏的の大活劇は、今や歳月を閲すること茲に二年有半に達する。此の前古未曾有の大戦争が社會の各方面に與へたる影響は、實に多種多様にして而かも莫大でなければならぬ、從つて之きが爲に吾人の得たる各種の教訓

も決して尠少ならざるである、取り分け軍事に關する者は頗る豐富であると謂つべきだ、乍併戰爭其の者は今尚進行中に在り、將又最近同盟側より講和の提議ありしとは云へ、聯合側に於て左して耳を傾けぬ現況であるから、尚當分は此の慘劇の繼續するものと考へるが主當である、從つて何時平和の曙光が認め得へきや、如何なる形式の下に講和が成立すべきか、戰後に於て如何に世界地圖の色彩が變更さるへきやは神ならぬ身には、未だ全く判定し難き事柄である、其の結果として現戰爭の與へたる教訓、之きよう得る經驗も尚今後の經過に徴した上でなければ、可否に對する最后の斷案を下すさとの、過早の感ある者尠なくない、就中列國國防の施設、勢力、編制等の如きは、列國境界線の異動と至大の關係を有するから、尚更今日に於て之れを論斷するさとは、至難且徒勞事である、夫き故余は茲に單に過去の出來事すりして慥に未來の趨勢を推定し得る事項の内にて、主要ち三四の點を論述して讀者に紹介

し、以て國防施設講究の參考に供する積りである、
一國民性の陶冶歐洲中原に於ける諸戰場に於
て兩軍對峙曠日彌久、勝敗の決容易に逆睹し
難きの觀あるは、果して何に原因するか、之き吾人の
大に注意する點である、各方面に於ける對峙兩軍
間の兵力其の他兵器彈藥準備の關係も決して
到る處平衡を得て然すべきの機毫末もちしとは
云へぬ、否慥に權衡ヲ失して居る地点が少なくないの
であるにも拘はらず物質上の優者にして容易に劣

者を突破蹂躪し能はざる所以のものは、深く詮索し
て見れば、結局も小我を捨てて大我に殉ずる的の犧
牲心及勇往邁進的の意氣に於て欠くる點に歸
納し得る樣である、近時聯合軍の威力著しく增進
して漸次勝算增加の傾向を採りつつある所以のもの
は、物質的準備の整頓も其の一因たるを失はずとは
雖、主たるものは上述無形的要素が、聯合國民の
自覺に依りて漸次陶冶向上せられつつある結果の發
露に外ならずと信ずるのが至當である、徐ろに列

國現時の施設を通覽すれば、戰後否戰爭の終る迄待つまでもなく、現に歐米の國民性は眞々裏裏に武裝的模言すれば硬性に變化進展しつつありと認め得へき節多々存在して居る、彼の個人の自由意志の尊重を國民最高の主義とせる英國さへも、今や強制徴兵法を實施し、或は軍需品の製造に使用し得べき、民間私有の工場をも、官の強制監督の下に置きつつあるも左したる苦情も出ぬ狀況である宇内に於て比較的軍事に冷靜なりし米國さへも、歐洲大戰爭に刺戟せられし結果である。が、何分近時に於ける軍備擴張熱の勃興は凄まじきの勢を呈して居る、のみならず各種學校教育の一科目として普く兵式訓練を入れたとも傳へられて居る。要は國家の爲めには、個人の自由と資材と犧牲とするも、敢て辭せざる底の精神の發露は實に顯著となりつつある、其の他戰爭に餘儀なくせられた自然の結果であるかも知れぬが、兎に角支戰國民間には、質素の美風、勤儉力行の良性は大に涵養陶冶

されつつある、食料の節約、婦人小児の職業的活動、各邦に於ける奢侈品輸入禁止の如き、又は多年一種の暴飲癖を有する露國國民が酒類販賣禁過の制限を甘受しあるが如き、大体に安逸を貪り嬉欲を逞する的の從來の弊風は、漸次除去されて國民性は堅實剛毅國の度を高めつつあるは確かにある、換言すれば各邦ともに國民の財と業とを奪はずして國防能力を高め得る所謂國民性の陶冶向上に對して大に努力が拂はるつつある趨勢である這間の消息は、吾人の將來を律する爲には、至大の關係を有するから、須らく識者の三省を要する

二、國家の自給自治的施設、歐洲今次の大戰爭破裂前に在りては、

文化の進歩交通の發達に伴ひて、大に旧套を脱却して、対立せる諸国間に劃せられある国境あり障壁の力を弱めて相互近通混和の程度を高めまりた、所謂露國の産穀は独国に輸入せられて同國民の生存に供し、独国の化学工芸品は盛に英佛に輸出せられて此等國民の活動を資け、露国は工業品を独国資産を佛国の輸入に待ちつゝありて、茲に有無相通ず相補ふて、国民生活上大なる幸福利便を享受つゝあり、また次第である、從つて斯く生活經濟状態の相互交錯復雜を極めー諸国民間に於ては、国民自己の生存に直接致命的

痛痒を感するから、此等生活経済状態の根本底を覆す様な大戦争は決して起らぬと云ふ觀察は、宇内の識者間に強人と一致して居た所である、然るに国家の存立発展の為めは、国民の幸福を一時犠牲とするも辞せずとのお未め必要が存するから、悲惨を極むる大戦争は、世人多数の預期に反して勃発したのである、戰争開始以来は、彼の所謂有無相通じ相補ふ的に幸福視せられて居た所の、従来の国民生活の因果は覿面現はれ来りて、輸出入の杜絶遅滞の悲境に伴ひ、各種の不便不自由を感するに

至りた、此の苦酸は遥かに戰場の中心より遠さかりて居る、吾人同胞までも、等しく嘗め来りた所である、茲に於て国産奨励の声は、世界の隅々までも風靡して、各邦競ふて軍用諸品は勿論のこと、財政経済其の他の産業に渉り総て他国の補給を待つことなく、独立自給し得るの途を講じ始めた、就中四面重圍の裡に在る同盟側に於て、一段と至大の努力が拂はれた様である、此等努力の結果として今日にては世界各邦ともに、大部分は自給自活の道が確立したのは事実である、此の趨勢は将来平

和恢復の後を渉りて考へても、益々助長さるべき運命を有して居る斯の如く他国の融通補給を待たつゝて、自国に於て万事万端自給自給し得ると云ふことは将来に於ける南戰の可能並戰爭の持続性を一段と高め得たるも一面に於ては覬覦し得るのである、此のことは今後の国防を議する者の須らく大に注意を要する点である、

三、徹底的なる作戰の準備　一昨々夏欧洲戰乱勃發より昨春頃まで約一年有半を経る間の戰爭は一言にして之を評すれば所謂準備と不準備の闘爭を外ならず、独逸及其與党側は、百年武裝的に訓練し、数十年戰闘準備を整へたる國家を挙げて兵火を開きたのである、之に反して聯合側に於ては、伸國を除きては（之迄として決して十分とは云へず）殆んど全く不準備の体勢に於て開戰を余儀なくせられたのは、万人周知の事柄である、就中伊國のごときは漸く一昨年初夏に至り始めて参戰準備略完整し、爾来漸く戰局の渦中

る投し得た、若し英露両国の戦争準備が平時より於て、徹底的に完整して居たならば必ずや今次の大悲劇は起らずして開戦の戦因たる塞間の紛糾も悟から悟へ葬り去られたる筈ひあれ、かくて伊國の準備まって整ひあって開戦第初より其態度を明確ならしめ世界に於ける醒風血雨の期間を短縮し得たらんと、吾人の今尚深く遺憾とする所である、抑も平時に於ける戦争準備の完整は平和の維持に至大の関係を有するのみならず、一旦不幸にして鉄火相見ゆるに至りても、戦期を短縮局限する為めに偉大の効果あ

陸軍

るべきことは、幾多余の憐々を為せる、一昨々日独軍が白耳義を蹂躙し佛軍を席捲して、恰も秋風枯葉を掃ふの勢を以て、佛都巴黎を指呼の間に眺めながら幾度頓挫を来して功を一簣に欠き又一昨春大軍東方に殺到して、露軍の根拠を屠り蹂躙しながら遂に露國を征服せしめ能はざりしが如き其の他聯合軍が試みたる「ヴヤンパニュー」及「ソンム」等の大攻勢の挫折して独軍戦線の一角だに突破し得ざりし事因那辺に存するや、畢竟するに根気強き攻勢継続の準備に於て欠くる所あり、結果に外ならず、所謂強

陸軍

弩の未熟なる者多く穿ち能はざりし痛恨事は各国の戦績
に明示して在る、故に我国に於ては平和維持の為まし、我朝
経綸の為まし、侍又根気強き攻勢決行の為まし列国が競争て
軍備の微、低的完整に努力すべきは時勢ある而して其の
努力の標準をば強弩の未熟尚克く鉄板をも穿貫し得る
の域に置くべきことなれば、従来の若き我国に微々、殆んと疑
ふの余地を存せず、

四、技術工藝の遺憾なき應用、蛇蹤数百里に亘る戦線の
到る處に於ては今や数百年来培養せられたる文化工

藝の粋を尽けて遺憾なく利用しつつある又開戰以後に於ては伊
国に促進せられたる各種新發明が多く戦場に應用せられて在
る、此等の全部を尽けて読者に紹介することは限りある紙面の
到底許さざる所なれども此の最も重要と認むる二三件を記
述するに止めて置く其の第一は空中征服に関する施設である
開戦前迄は、飛行機は主として偵情偵察の補助に、稀に大砲
射撃のとき射弾軍到着の正否を観測する為に使用せらるる過
ぎざるものと、吾人は考へて居た、然るに開戦後の今日に於ては、
此の二大任務が完全に達成せらるるに至りしのみならず、其範圍も

大に擴張せられて居る、加之ならず爆彈投下に依りて敵の軍隊、製造所場、市街等の攻撃破壞する為持て来たる用せらるるる至り先、從つて之迄を除、撃駆逐する為の專用航空機が採用せらるるに至り今や制空權獲得の為屢彼我航空機間の仕烈なる戦闘が演出せられ其の戦闘規模模並度數も漸次擴大增加の趨向を示して居る帝國都鄙に於て士卒の心膽を寒からしめたる「ナイルキ」「スミス」「近くわ」「スチ」「ソレ」壊の宙返り術のめざわ

戦場後方の斯術練習場に於ては、目下盛んに演練せられつゝあるのみならず、亦之に適応する器材は続々發明新調せられつゝある此の現時の趨勢に鑑み、一方將来に於ける航空機能力の增進に考へ及ぼしたるは、戦后若干年の内には各国ともに一大航空軍を建設常備するに至るべきは強ち疑ふの余地を存せぬ、次は自動的輸送機関の応用である、三万余の車輌は、今や東西南の各戦場に馳駆奈走して軍隊、弾薬、糧秣、傷病者の輸送上に大活動を試みて居る、実は東普並露国内の沼澤多き地方に於

けるこの適用に関しては吾人の大に疑問とする所である、
近時南々所によれば濕潤沮洳の地方にも今や人為的に
構成せられたる良路を認め得るに至り、此等機関は盛ん
な活動ありとの事である、敵前に於て大軍を以て対する、山地
の通過、大河の渡過の如きは、古来用兵上の至難事とした處
である、然るに「ウイスケユラ」「ニーメル」「サン」「ダニーエブ」諸大
河の渡過、「カルパーテン」山脈並墺羅国境に在る大山径の
通過も、近代技術の補助に依りて外容易に実行せられた
るが如き觀がある、其の他巨砲の製造、豊富なる弾薬の

準備就中近接戦闘を有利に実施せしむべき特種兵器の構
造等は、論するまでもなく、将来国家の武装に方り亦最重要事
項として御算し置くべきことが必要である、之を要するに人智を
以て天然を制服し之を凌駕し能ふの程度は着々と増進
の趨勢にある、此の幸運に没きさる為の努力は、技術の整方
面に於て尚ほ著しく幼稚の域を脱せざる帝国現時の立場
に於ては殊更に注意すべき點である
戦後に於ける列国の軍事施設は各種の形体を具して実
現せらるるであらんも其の陸上の施設としては、形体の如何に

拘はらず、上来説述したる四大要目を基準として之れが適用の程度如何を帰着するものと考へ居りて左したる間違はあるまじ、吾人の将来に対する陸上施設も此の要目の適用する実現を期する方針の下に遠進しあたらば先つ以て大体目的を達するものと信ずる